

図書雑感

会計研究科教授 林 隆一



会計大学院では租税法の講義とゼミを担当していますが、本学では租税法関係の専門書が4階の車道図書館や12階の会計大学院図書室に十分備わっているとはいえ、また、設置されて日も浅いため最近の図書は別にしてそれ以前の専門書や雑誌は見当たらないことがあり、租税法関係の専門書がないときは、東京の大崎駅前にある日本税務研究センターの図書室を利用しています。ここは、日本税理士会連合会の建物の中にあり、税理士会の租税法の研究機関として日本税務研究センターが設置されており、その附属施設として図書室がありますが、租税法関係の蔵書はかなり多く、もっぱら利用している方を眺めると院生と思われる方々が随分おられます。ただ遠方から時間をかけて訪れ、ここで目的の書物を探し当てたとしても、1回に借りられる図書は2冊まで、借り

られる期間が2週間となっているため、利用者にとっては利用期間が若干短いように思われます。しかも、休館日は土日だけでなく図書整理のため月末も含まれ、土日の休みを利用して出かけることができず、利用者からは不満の声が出ています。数年前のことですが月末の休館日を知らずにここへ来てがっかりしたことを覚えています。

このため、ここを利用するには平日に限られるため、東京での会議の折に時間をみつけてここを訪れ利用する機会を設けています。当初からここに蔵書があることが分かっている場合で、出かける時間もないときは、日本税務研究センターの賛助会員であればFAXによる申し込みが可能です。

いずれにしても、土日利用が制限されていることは利用者にとり大変不便なことです。民間施設が土日を休館日とすることは、利用者への利便性と施設の維持費との比較の問題であり常にコスト削減を意識する組織であればそのような方向に流れてしまうので

残念です。

その点、大学図書館は土日も開館しており利用者へのサービスを重視しているといえます。

自宅には学生時代からの本が相当ありますが、何度も整理をしたのですが、いつも妻から本を整理（この場合の整理は処分を意味しています）せよと迫られています。学生時代の頃の岩波文庫と新書などは懐かしい思い出が詰まっています。学生時代には、伊藤整の本を随分読みました。彼は小樽高商から東京商大へと進学し商学を専攻したのですが小説家を目指しました。

彼の同郷には小林多喜二がいますが、思想的にのめりこむことはなく別の道を歩みました。今から思うとなぜ伊藤整の小説にひかれたか思い出せません。

野間宏の『真空地帯』や高橋克己の『憂鬱なる党派』を読んだときは、大変衝撃が走りました。それまでの高校時代では想像ができなかったあの昭和の暗い世相の中での時代感覚と閉塞感が漂う内容の小説でした。この二つの小説の時代背景は違いますが、野間の作品は軍隊の中で思考が停止状態に追いや

られる初年兵と古参兵などの状況をリアルに表現していますが、高橋の作品は党という思想集団の中で人間性がズタズタにされていく状況を記述しています。これらの作品を読み自分のこれまでの体験とはかけ離れた異質な世界が以前に存在していたという事実を小説は教えてくれました。しかし、これらの小説の読後感といえば、何とも形容できない観念が脳裏を翳め、憂鬱という言葉が自分を縛るように思えてならない状態が続き、しばらくは観念のウィルスが浸透するような錯覚に陥る時期もありました。これらの小説の呪縛から逃れようとして伊藤整を選んだかもしれません。

現在後継者問題で報道されている北朝鮮が話題に上る前から、この国に関する本を読み始め気がついた時には100冊を超えていましたが、家族の中では誰もこの国に関する書物に興味を持たず、仕方なく無理やり友人に預けてしまいました。その後本を読んでいるともいないとも言っていないため、果たして彼がどうしているかわかりません。古い本などは物置においてありますが、それが再び日の目を見ることはなさそうです。